

1 条件設定に当たって

子どもは、「なぜだろう」「考えてみたい」という知的好奇心を持ち、意欲的に課題に取り組む時、自分なりの考えをもって課題解決に向かって進んでいく。考えを持つ際、足場となるのは既習や経験である。この既習や経験があるからこそ、子どもは、ある程度自分なりの考えをもつことができる。ただし、自分一人の考えで課題を解決できるとは限らない。友達と伝え合う中で自分の考えを見つめ直し解決していくことができる。友達の考えを聞く中で、同じような考えに出会ったならば、自分の考えに自信をもち強化することができる。また、自分と違った考え方に出会ったならば、友達の考え方に影響を受け、自分の解決に生かしていくこともできる。

このように、友達に話すことで自分の考えを見つめ直し整理し、自分の考えを確かにしていくと考える。

一人の考えで課題を解決するのではなく、友達と伝え合う学習を行うことで、互いに影響を与えたり受けたりし合って、自分の考えを確かにしていく姿を目指したい。

この姿を目指すためには、以下の2つの条件が必要であると考えられる。

- ・条件A 自分と友達の考えを比べて共通点や相違点に気付く
- ・条件B 自分の考えを繰り返し見つめ直す

2 条件について

- ・条件A 自分と友達の考えを比べて共通点や相違点に気付く

子どもは、自分の願いや思いに沿った課題に出会ったとき、意欲的に課題を解決しようとするだろう。このとき試行錯誤をしながら、一人一人が自分なりの考えをもつと考える。そして、子どもが同じ課題に向かって、意欲的に解決しようとしていたならば、お互いの考えに関心を持ち、かかわりあって確かめる姿につながるだろう。

友達とかかわる中で、自分の考えを確かにしていくためには、互いに考えを聞き合い、相違点に気付くことが必要だと考える。

子どもは、自分の考えをもって話をするが、友達との考えの相違点に気付いていないことがよくある。それでは、それぞれが自分の考えを主張をすることどまってしまう。互いの考えの相違点に気付くと、「どうしてだろう」「もっと聞いてみたい」と相手の話に興味が生まれる。すると、友達の話に関心をもって聞いたり、質問をしたりして、正しく理解しようとする。相手の考えを理解しようとするとき、気付きと気付きが繋がったり、新しい視点に気付いたりするような話し合いになると考える。

また、結果は同じでも過程や根拠が違う場合は、その相違点に気付くことでより理解しようとする姿につながり、友達とのかかわりによって自分の考えがより確かなものになると考える。

共通点や相違点に気付くことで、それまでばらばらだった一人一人の意見がいくつかにまとまり、話し合いを焦点化させていくことができる。話し合いが焦点化することによって、考えが深まっていくであろう。

友達との共通点や相違点に気付くためには、体験が重要である。特に低学年の子どもは、頭の中だけで考えるより体験を通して考えることで、多くの気付きや実感を伴った理解を得ることができる。体験から自分の考えをもって話し合うことで、互いの考えが理解しやすくなり話し合いが活発になる。その結果、互いの共通点や相違点が浮かびやすくなると考える。

自分と友達との考えを比べながら共通点や相違点に気付くことで、自分の考えを更新し、考えが確かになっていくと考える。

・条件B 自分の考えを繰り返し見つめ直す

自分の考えを確かにしていくためには、友達とかかわり自分の考えを見つめ直すことが必要である。自分の考えを見つめ直すことによって、もう一度整理してとらえなおすことができるからである。何度も自分の考えを試す中で、見つめ直しは起こる。また、友達の試したことを見たり聞いたりする中で、自分一人では気付くことができない考えにふれ、自分の考えを見つめ直したり友達のよさを自分に取り入れようとするきっかけになるだろう。このように友達とかかわりながら自分の考えを見つめ直すことで、最初はあやふやだった考えが次第に確かな考えへと変化していくと考える。

また、繰り返し試すことは、事象を注意深く見つめたり、予想を確かめたりすることにつながる。その中で友達とかかわり見つめ直しを繰り返すことで、自分の考えをより確かにしていくことができるであろう。

さらに、友達と話し合った結果、自分の考えが最初と最後までで変容したことを自覚すると、友達と話し合うことのよさにも気付く。この経験を積み重ねることが、主体的に話し合っただけで思考する姿につながっていくと考える。

3 おもな実践

・条件A 自分と友達の考えを比べて共通点や相違点に気付く

(1) 生活科「学校探検にレッツゴー」における実践 ①

この単元の導入では、子どもが学校探検に行き、ものをくわしく見てきたくなるような意欲付けを行って、見たものからその場所の特徴や役割に目を向けるようにしていきたいと考えた。

そのため、子どもたちがものに興味を持てるように、クイズから入ることにした。ある教室のものの写真を提示して、それをヒントに教室を当てるクイズである。写真は全部で3枚にし、それを1枚ずつ見せることでものに注目させ、理由も加えて話させることにした。クイズにした場所は、どの子どもも体重測定などで何度か訪れた体験のある保健室である。

1枚目の写真は冷蔵庫と流し台である。よくわからないなりに、子どもたちは、「家の台所みたいだ」「先生たちが使っていると思うから職員室だと思う」「校務士さんのいるパントリーだよ。だってお茶を沸かすのに水道があるから」と学校について知っていることとものの使い道をつなぎ合わせて、様々な教室を思い浮かべていた。友達の様々なわけを聞いて、「それもそうかもしれない」とつぶやき、揺れているのがわかった。2枚目の写真はぬいぐるみである。これは保健室に置いてあることを知っている子も何人かいたが、「なんで学校にぬいぐるみがあるのかな？」と不思議そうにつぶやいていた。3枚目の写真は熱が出たときに使う冷却シートである。このシートを見ると、ほとんどの子どもはこの場所が保健室であることに気付いた。どうして保健室だとわかったのかを尋ねると、「熱が出たときにおでこに貼るよ」や「熱が出たときに使うからだよ」「手を怪我したときに貼ってもらったことがあるよ」と答えていた。そこで、「教室にはあるの？」と尋ねると、「ないよ。だって教室は勉強するところだから、具合が悪くなったら保健室に行くよ」と、みんなで話し合っている中で、保健室ならではの特徴を確かめることができた。その後、ぬいぐるみや流し台がどうして保健室にあるのかを考えた。最初は手の上がる子どもは少なかったが、「ぬいぐるみは具合が悪い子が見てなぐさめられるから」や「流し台は風邪がうつらないように手を洗ったり、うがいをしたりするからだ」「冷蔵庫は頭を冷やす保冷剤が入っている」など保健室の役割が共通点となって、それぞれのもとの保健室での役割をつなげて考えを出し合うことができた。

これらの気付きは自分一人では見つけることはできなかったであろう。友達とのかかわりの中で見えてきた共通点をもとにして、ものの役割が明らかになってきた。

(2) 生活科「学校探検にレッツゴー」における実践 ②

実践①のあと、実際に学校を探検する計画を立てた。探検の仕方をどの子どもも体験し、次へ生かすことができるように、一つ目を探検する場所は、全員で探検し、その後はグループで分かれて探検することにした。子どもたちは一つ目を探検する場所として、保健室を選んだ。子どもたちは、保健

も色に違いがあることや葉に毛が生えていること、双葉の間から出てきた葉の形を「ドリルみたい」とたとえたことである。その友達の気づきが本当かどうか、自分の朝顔で確かめる姿も見られた。個々の気づきを全体で交流することで、交流前の観察に比べて、色や形など小さな変化でもよく見て、気づきを表現する姿につながった(資料4)。

・条件B 自分の考えを繰り返し見つめ直す

生活科「あさがおとなかよし」における実践

この單元では、朝顔の花を使って色水遊びを行った。色水遊びとは、ペットボトルに水と朝顔の花を入れて容器を振り、花の色を水に移す遊びである。

最初は薄い色の水をつくるだけでも満足をしていたが、試行錯誤をする中でだんだん濃い色のついた水を作ろうとする姿が見られるようになってきた。そこで、授業者が紙を色水で染める遊びを紹介することにした。薄い色水で染めた紙と濃い色水で染めた紙を子どもに見せて、朝顔の色水で染めたことを教えた。すると、子どもは、「自分も紙を色水で染めて遊びたいな」と紙を染めることに興味を持ち、「薄いのは色がついていないみたいだよ。濃いほうがきれいになるよ。」と濃い色水作りを試すようになった。

子どもは色水作りをして繰り返し遊んでいる中で、濃い色水を作ることができる子どもが出てきた。試しているものの、自分では濃い色水ができない子どももいたので、濃い色水をつくるための工夫を交流する場を設け、花の数や容器の振り方などの工夫を話し合った。その結果、濃い色水作りにはいくつかのポイントがあることがわかった。その後実際にグループで一緒に色水作りを行った。濃い色水ができなかった子どもも、友達から直接アドバイスを受けて、自分の色水づくりを見つめ直していた(資料5)。そして、色水づくりを試すことで、どの子も濃い色水を作ることができ、紙を染めて楽しむことができた。

繰り返し活動を行う場があり、互いに気付いたことを伝え合うことができると、子どもは考えを見つめ直すことに、効果があるとわかった。

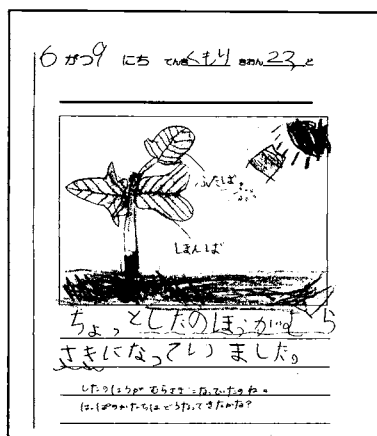
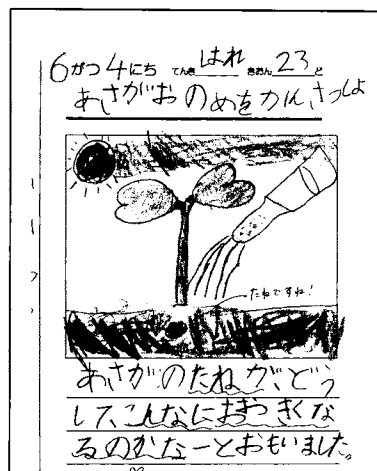
4 今後に向けて

これまでの実践の中で、以下の課題が明らかになってきた。

条件Aでは、子どもの発言には多くの気づきが含まれているが、聞くだけでは共通点や相違点に気付くことが難しいとわかった。見て比べられるような板書などの工夫が必要である。

条件Bでは、自分の考えを見つめ直すためには、試す場を確保することと、試す際に何を变えて試す(試した)のか、視点をはっきりさせて話し合わせる事が思考を深める上で大切だとわかった。

これらの課題を考慮して、よりよい手だてがとれるように、今後も実践を重ねて探っていきたい。



資料4 よさを見つける前(上)と見つけた後(下)の観察カード

アドバイス	見つめ直し	試したこと
「もっとたくさん花を入れたほうがいいよ」	花の数	花の数を増やす
「水は少ないほうが濃くなるよ」	水の量	水の量を減らす
「薄い色の花は、水の色も薄くなるよ、濃い花をいれるといいよ」	花の色	薄い色の花より濃い色のものを選ぶ
「もっとたくさん振ったほうがいいよ」	容器の振り方・回数	振る回数をもっと増やす 強く振る

資料5 友達のアドバイスをうけて見つめ直した例